

新しい令和文学？

未来の国語の教科書の「令和文学」の欄には、「note 文学」が載るかもしれないと思うのですが、どうでしょう。SNS から生まれた新進作家を見てみましょう。

まず、29 歳の岸田奈美さんです。岸田さんは、note を始めて僅か一年後の令和 2 年に処女作『家族だから愛したんじゃない、愛したのが家族だった』が小学館から出版され、なんと発売前に増刷決定というとてつもないベストセラー作家になりました。

岸田さんが有名になったのは、令和元年の夏ごろの「弟が万引きを疑われ、そして母は赤べこになった」という note の記事でした。ダウン症の弟さんが学校帰りに、お金を持っていないはずなのに、ペットボトルのジュースを飲みながら帰宅して、「万引きしたのか」と家中で大騒ぎになった話です。数週間のうちに 23.255 の「いいね」がついて、プロの作家に見いだされるきっかけになりました。

<https://note.kishidanami.com/n/n28c8d62e0eee>

岸田さんは note という媒体の特徴を生かし、ゆったりスペースを取った横書きの文を、下へどんどんスクロールして読ませます。テンポの速さ、読みやすさ、軽さ、行の間の取り方が、従来のブログと全然然違います。関西弁や俗語も交えた歯切れのいい文を跳ねるような明るい口調で一気に読ませた後、最後に一言「しらんけど」とどんでん返しのオチをつけたりする面白さがあります。

Note という媒体は、これまでの日本語文にはない新しい文体を生み出したのではないのでしょうか。岸田さん自身が、書籍化に当たって文を縦書きに直す際に、ずいぶん文を練り直したという趣旨のことを書いておられましたから、やはり縦書きとは違うリズムの文なのです。

もっとも、岸田奈美さん自身が稀有なキャラであることも事実です。岸田さんは行く先々で必ず（通常は起こりえない奇々怪々の）出来事に遭遇します。歌手の槇原敬之が覚醒剤所持で逮捕された日、岸田さんが乗った新幹線で、突然当の槇原敬之の歌声が流れて来た。それもイヤフォンの音漏れレベルではない爆音だ。そこでその出来事をツイートすると、一分も経たぬうちにフォロワーから「それは私の同僚なので、代わりにお詫びします」と返事が来たと言うのです。そのフォロワー氏は「新幹線の中で誤って iPhone 本体から爆音を出してしまった」という友達のツイートと岸田さんのツイートをシクロを見て、すぐ岸田さんに連絡したそうです。この顛末も下記で無料で読めます。

https://note.kishidanami.com/n/n2ad132a926b5?magazine_key=mce65de3854be

もう一人の新進作家は、令和元年にツイートを始めた 31 歳のサラリーマンのサノ氏です。瞬く間に 6 万人のフォロワーを得て、令和 2 年 5 月に KADOKAWA から処女作『実家が全焼したらインフルエンサーになりました』が出版されました。サノ氏はツイッターや note で自分の「切ない体験」を淡々と綴っているところが、得も言われぬおかしみとなっています。

https://note.com/sano_sano_sano_

実は、サノ氏と岸田さんは同郷、同じ高校出身、しかも上京して入居したアパートが同じ、2020 年夏の旅行先も偶然同じで、同じ場所で同じ木を撮影して二人ともツイッターに載せたという、信じられないようなシンクロ関係です。

今、大学院の上級日本語講座で使っている教科書に梅田望夫『ウェブ進化論』が載っていて、ちょうど「(ウェブの発展で)世の中には、途方もない数の「これまでは言葉を発してこなかった」面白い人たちがいて、その人たちがカジュアルに言葉を発する仕組みをついに持った」という一節を読んだところでした。上記のお二人はまさに、その世界から飛び出してきた作家さんではありませんか。

そこで受講者に岸田さんとサノ氏の文を読んでもらって、感想を聞いてみました。日本に留学経験のある学生さんは岸田さんの文がとても面白くて読みやすいと思った一方、ヨーロッパの大学で勉強しただけの学生には岸田さんの関西弁、俗語、口語の語り口がとても難しかったようです。サノ氏の「です・ます体」の文は、読みやすいと好評でした。

学生さんたちはこの二人の新進作家とは数歳しか違わないのですが、あまり親近感や共感は感じなかったようです。なぜなら「ドイツ語でもあまりブログは読まない」「ドイツでは特定のプロのブロガーが書いているだけで、一般の人は参加していない」そうで、普通の人が自分の文を広く発信している日本とは状況が大分違うようでした。少なくとも「ツイッターでフォロワーが増えたら、大手出版社からオファーがきてすぐベストセラーになった」ような文筆家は知らない、とのことでした。ドイツには note のように簡単に課金できる投稿システムがないことも、無名作家がデビューしにくい要因の一つかもしれません。

もっともドイツではユーチューバーは広範に活躍しているようなので、口頭でのパフォーマンスが強いドイツと、曲水の宴に始まり連歌・川柳と互いにモノを書き合うことを伝統としてきた日本と、社会的ネットワークの発展方向が異なっているのかもしれない。いずれにしても両文化圏のそれぞれのソーシャルネットワーク文化の展開が面白そうです。(終わり)